

## 知識・応用力・倫理を備えたエンジニア

小西 正朗



はじめまして、2012年10月から北見工業大学の助教として働いている小西正朗と申します。これまで、関西大学工学部を卒業し、大阪大学大学院工学研究科で学位を取得後、産業技術総合研究所で特別研究員(ポスドク)、海洋研究開発機構研究員を経て、現在の職に就きました。新たな職場で研究の立ち上げに奔走しております。また、研究の傍ら、技術士資格を取得し、2012年3月から「技術士(生物工学)」に登録し、活動を始めたところでもあります。ここで、私の資格取得体験談とともに、資格取得に関することと生物工学部門における「技術士」活動について紹介したいと思います。

## 「技術士」資格取得と取得後の活動

「技術士」は“産業経済、社会生活の科学技術に関するほぼすべての分野(21技術部門)をカバーしている科学技術に関する高度な知識と応用能力を備えた技術者であり、「技術士法」により高い技術者倫理を備え、継続的な資質向上を努める責務を負っていることを国に認定されている者”のことを言います。技術士になるには、まず、それぞれの技術士法や専門分野に関する択一問題式の技術士一次試験に合格する、もしくは、日本技術者教育認定制度(JABEEプログラム)を採用している大学や大学院の教育課程を修了する必要があります。さらに、二次試験を受験するには「技術士補(修習技術者)」としての通算4年の業務経験、もしくは科学技術に関する7年以上の業務経験を必要とし、論述式の筆記試験、業務経験に関する技術的体験論文(2013年度から廃止予定)の提出、口頭審査を経て、技術士登録した者のみが「技術士(専門分野)」と称することができます。生物工学部門の一次試験の合格率は、例年、30~40%程度(2012年度は72.1%に上昇)、二次試験は20~30%程度(2011年度26.7%)であり、難関の資格のひとつに数えられることが多いようです。技術士の知名度は部門によって大きく異なります。技術士資格を有することで、実質的な独占業務を行うことができる部門(建設・上下水道など)では、その知名度が高くなっています。一方、生物工学部門の知名度は残念ながら低いようです。生物工学部門の技術士には、全部門共通の資格認定、いくつかの国家資格の受験資格などが付与されますが、大抵、大卒で与えられる資格と同等であるなど、他の資格

を取る上でもメリットが多く感じられないことが、知名度の低さにつながっているのかもしれませんが。

実は私自身も、学生時代は「技術士」という資格について、よく知らなかったのですが、産業技術総合研究所に所属していたときに、当時のグループ長の北本大先生から「今後の就職や、企業の研究者からの信用を得るのに有利」という理由で技術士という資格の取得を勧められ、技術士一次試験を受験したのが「技術士」へのきっかけでした。勧められた年に一次試験を受験し、合格しましたが、業務経験が足りなかったため二次試験を受験できず、しばらくは合格したことも忘れていました。その後、海洋研究開発機構に移り、研究のネタ探しをしている時期には比較的時間に余裕があったので、さまざまな資格を取得することがマイブームとなっていました。丁度、その時期に業務経験が7年(大学院2年を加算)を超したので、二次試験を受験しました。2回の受験で何とか合格することができました。受験勉強が技術者倫理や自身の研究とは直接関係のない分野(+漢字を書く)についても勉強する機会にもなり、よい自己研鑽になりました。

技術士には大きく分けて、二種類の業態が存在します。ひとつは技術士専業の独立技術士で、コンサルタント業、国・公共団体などの受託調査などの請負を生業とする業態です。もうひとつは企業内技術士であり、企業などの本業の傍ら技術士業務をする業態です。前者には、若手が少なく、企業などを退職された方が多いようです。後者のほとんどは企業・大学などの在籍者です。後者である筆者の場合、技術士会生物工学部門で開催される年1回の業績発表会、例会(6回/年程度)、研修旅行(見学会・講演会)、各支部会などの活動に参加し、生物工学における幅広い分野の技術士との交流を行っています。学会や研究集会と比べて、民間企業所属の方が多く感じます。技術士会での活動を通して、学会活動だけでは得られない情報を収集できることや、人的コネクションの構築が可能なのが、大きなメリットと感じています。また、将来、技術士資格を活かして独立し、生涯現役の技術者として活躍できる可能性もあります。「技術士」資格は労多くして得るものが少ないように感じる部分もありますが、活用次第では大きな力になるかもしれません。皆様、「技術士」資格取得に挑戦してみては!?